

白い英雄は少女たちと
夢を見る

九重くるみ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ベル君がオラリオで色々な女性に会い、冒険すると同時にどんどん仲良くなっていく物語です

とりあえずは原作にそっていく感じで行きます！

初めての作品なので大目に見てください…

タグは恐らくどんどん増えていきます

独自設定有りです…

△マークはR18ですので、よろしくです…

目次

第1章 出会い

N o. 6	N o. 5	N o. 4	Δ N o. 3	N o. 2	N o. 1
39	31	24	16	9	1

第1章 出会い

No. 1

今日もヘステイアファミリアは平和だった。

「ベル君！おかえりー！」

ダンジョンから帰ってきた僕を今日も暖かく神様が出迎えてくれました。

「神様、帰ってきましたー！ただいまー！」

声を張り上げて部屋に入ると僕に声をかけてくれた人はソファアアの上で寝転がっていた。読んでいた本をしまうと起き上がって僕のところへ寄ってきた。

小さい両手を。パタパタと動かし、怪我がないかを確かめてくる。

「そんなに心配しなくても怪我はないですよ、まだ2階層までしか探索してませんから大丈夫です」

と微笑みながら答えた。

「それでも心配なものは心配なんだよ」

その言葉に僕はすこし照れてしまった。

「それじゃあベル君のステイタスを更新しようか」

「お願いします」

神様はステイタスの更新を少し驚きながらしてたけどなんでだろ…

「ほら君の新しい【ステイタス】」

ありがとうございます、とって受け取った用紙に目を通す

ベル・クラネル

L v. 1

力 : I 7 7 ↓ I 8 2

耐久 : I 2 4

器用 : I 9 3 ↓ I 9 6

敏捷 : H 1 4 8 ↓ H 1 6 9

魔力 : I 0

<魔法>

「」

<スキル>

「？」

これが僕の【ステイタス】の概要だ。

すこしずつ成長しているのが分かってすこし嬉しい気持ちだ。

ヘスティアはすこし複雑だった

本当はベルにはひとつくスキル>が発現していた

それは…

【憧憬一途】

- ・早熟する。
- ・懸想の続く限り効果持続。
- ・懸想の丈により効果向上。

(いったいなにがベル君をこんなに動かしたんだろう…)

ヘスティアをそんなことを考えながらベルとともにじやが丸くんを食べながら夜を過ぎすのだった。

ベルの冒険はまだまだこれからだ。

今日もベルはダンジョンに向かう、いつもの路地を抜け大通りにでてしばらくするとどこからか視線を感じた。

思わず周りに注意を向けたせいで前からくる人にぶつかってしまった。

「きゃっ」

「わあっ」

ぶつかってしまったのは僕と同じヒューマンの少女だった。

服装は白いブラウスと膝下まで丈のある若葉色のジャンパースカートにその上から長めのサロンエプロン。

すごい可愛らしい人だななんて思ってしまった…:

「すみません！僕の不注意で！」

「いえいえ、こちらこそすみません。私も前を見てなかったものですから。」

慌てて謝るとあつちも頭を下げてきた。すごい申し訳ない…:

それでもダンジョンに潜ろうと目的を思いだし、別れの挨拶を告げようと思つていた。

…: そんなことを思っていた矢先にグウと僕のお腹から情けない音が響いた。

「くすつ、お腹すいてるんですか？」

「はい…:」

そうだった、家を急いででたせいで朝食を取っていないことを失念していた…:

その人はすこし考えると待つててくださいといつてどこかにかけてしまった。

少しして戻つてくると良ければ食べてくださいと小さなサンドイッチが入つたお弁当を持つてきた。

「え、！そんな悪いですよ！」

「このまま見過ごしてしまうのは私の良心が痛むので貰ってくださいませんか…: ?」

ず、ずるい…

そんな言い方されては貰わない訳には行かないじゃないか。

「冒険者さん、これは利害の一致です。私もちよつと損しますけど、冒険者さんはここで腹ごしらえができる代わりに…」

「代わりに…？」

「今日の夜、私が働くあの酒場で晩御飯を召し上がって頂かなくてはいけません」
そう言つて、その人が働いている酒場を指さした。

「…」

今度は僕が目丸くした。

「本当にずるいなあ…」

といつて2人して破顔した。

「それじゃあ今日の夜に伺わせてもらいますっ」

「はいお待ちしております」

そうだ、一応名前を聞いておこうと思ひ店員さんに向かつて言う。

「僕はベル・クラネルって言います、貴方の名前は？」

「シル・フローヴァです。ベルさん」

僕らは笑みと名前を交わしあつた

今日もダンジョンに一日中潜って来た、モンスターを相手取るのには少し慣れて来たがまだまだ弱い、そう思わずには居られなかった。

あの人をいつか・・・と

夕方、僕は今朝シルさんと交わした約束を守るために酒場へと向かった。

「()だよね・・・」

ようやく見覚えのあるカフェテラスを見つけ、僕はその店頭で足を止めた。

周りにある酒場でも一番に大きいかもしれない。

シルさんの働いている酒場、『豊饒の女主人』。

中では、店員さん達がせわしなく動き回っている。

「()って僕には難易度高過ぎない・・・？」

まあなんとというか・・・店員さん全員が女性なのだ。

というかずつとその酒場を見ているせいでさっきからテラスの客からの視線が痛い・・・

「ベルさんっ」

「えっ」

あれ、いつの間に来たのか、シルさんが僕の隣に来ていた。

ぎこちない笑みを浮かべ囁みそうになりながら、

「やって来ました。」

「はい、いらつしやいませ」

シルさんは朝と同じ格好で僕を出迎えた。

店の中はたくさんの人が料理をたべていた。

なんとなくすこし落ち着いて食べたいなあなんて思っていたら、

その意図を汲み取ってくれたのかシルさんはカウンター席の端の方を案内してくれた。

これで落ち着いて食べれそうだななんて思っていると、

「アンタがシルのお客かい？冒険者の癖に可愛い顔してんなあ！」

カウンターから乗り出してきたドワーフの女将さんに話しかけられた。

「……そのことは僕も気にしてるので言わないで欲しかった……」

少しして料理を頼みも落ち着いてくると、シルさんがこっちの方に来た。

「ベルさん、ちよつといいですか？」

「どうしました？」

小声で話しかけられたので少し驚いたが、なんとか平然を装いながら答えた。

「私、ベルさんのこと気に入っちゃったので明日2人であつてくれませんか？」

「……はい？」

なにか僕、聞き間違えたかな？

「えっと… いま2人で会って欲しいって言いました？」

一応確認を取ってみる…

「はいっ、だめですか…？」

だからその聞き方はするいつて…

No. 2

ほんとにずるい人だなあ：

僕は『豊饒の女主人』を後にして帰路へとついていた。

今朝会った人なのになんかデートの約束取り付けられちゃったよ：

あれ、でもあんな可愛らしい人とデートなんてもしかして僕はついているのではないだろうか？

まあなにはともあれ、約束したし明日は少し冒険はおやすみしよう。

「ベル君おかえり！」

「ただいまです、神様」

「遅かったから心配したよ！」

「すみません、酒場で食事を頂いていたので」

神様がすこし首をかしげながら

「なんかベルくんから香水の匂いがする…。」

とぼやいていたのは聞こえないふりをした…

「じゃあ今日も『ステイタス』を更新しようか！」

「はい！神様！」

そう言つてベットにうつ伏せになる。

「どうですか？」

「うん、順調に能力があがつてるよ！」

ベル・クラネル

L v l

力 : I 8 2 ↓ H 1 3 5

耐久 : I 2 4 ↓ I 5 1

器用 : I 9 6 ↓ H 1 1 4

敏捷 : H 1 6 9 ↓ G 2 1 0

魔力 : I 0

<魔法>

「」

<スキル>

【憧憬一途】

- ・早熟する。
- ・懸想が続く限り効果持続。

・懸想の丈により効果向上。

【風乱恋慕】

・絆を深めることで自身の身体能力強化

・女性のみ対象

・絆が強ければ強いほどその効果は自身の周りにも付与される

(∴∴) なんてまたスキルが増えてるんだ∴∴?)

「ベル君、今日は口頭で伝えても大丈夫かな?」

いつものようにスキルを伝えずにベルにステータスを教えた。

次の日、約束の9時より前に広場に着くと、そこにはワンピースを着たシルさんがベ
ンチに腰掛けていた。

「すみません、待たせちゃったみたいで∴∴」

「私も今来たところなので大丈夫ですよ?」

早速、僕達はデートを始めることにした。

まあ結論から言うとデートと言うより荷物持ちに近かったけど∴∴

まずは2人で街を歩きながら昨日のことを話した。

「ベルさんがほんとに来てくれるなんて思いませんでしたよ?」

「いや、ちゃんと約束は守らないかと思つて。サンドイッチもすごい美味しかったですしー!」

「ありがとうございますといつて微笑むシルさんにドキツとしてしまった…」

「どうしました?」

「…いえ、なんでもありませんよ…」

顔を逸らしながら僕は答えるしかなかつた…

「じゃあまずはあのお店から行きましよう!」

といつて僕を連れて洋服屋に入つていった。

「ベルさんそれすごい似合いますね!」

「そうですか…?」

つつきりシルさんは自分の洋服を買うのかと思つていたけれど、それは違つた。買ううとしていたのは僕の洋服だつた。

「シルさんは自分の洋服買わないんですか?」

「私は沢山持つるので大丈夫ですよ」

しばらく着せ替え人形と化していた僕はひと通り洋服を着ると、

じゃあこれとこれくださいとシルさんが似合つてたと思う服をプレゼントしてくれた。

いや、さすがに申し訳ないのでちゃんと払いますよ? つと言つたが

「あんまり人の好意を無下にしちゃだめですよ?」

と優しく言われて何も言えなくなってしまう。

そのあとは、食事をしたたり酒場で使う材料を買いに行ったり、公園でお話したりと楽しい時間を過ごした。

「そういえばどうしてシルさんはあの酒場で働いているんですか?」

「うーん…、昔色々あつて大変だった時にあのお店のお店の主人のミア母さんに助けられたんです、それでその恩返しをしたいなつて思つたんです。」

「そうだったんですか?」

すこしシルさんが悲しげな雰囲気を出したのでそれ以上は聞かないことにした。

あつという間に時間が過ぎてもう夕方になつてしまった。

そろそろお別れかななんて思っていると、

「ベルさんすこし付き合つてもらつてもいいですか?」

と不安げに尋ねてきたので

「いいですよ?」

とどうしたんだろうと思ひながらも答えた。

シルさんのあとを追ひながらどこに行くんだろうと思つてみると、一軒の赤い家の前で止まった。

「いはいは…?」

シルさんに尋ねると、

「ここは私の家ですよっ」

「…ん?」

…家?

あれシルさんの家についてしまった?

「じゃあはいりましょっ」

流されるままに僕はシルさんの自宅に来てしまった…

「えっと、色々驚きすぎてなにを言ったらいいかわかんないですけどどうしてここに?」

「んーと、もう少しベルさんとお話したかったから…かな」

「それはすごく嬉しいんですけど、そろそろ帰らないと神様が心配しちゃうので…」

「そうですよね…」

神様のことだし多分本当に心配すると思う。

今日はありがとうございますと行って帰ろうとしたところで、

「待ってください!」

「えっ…」

後ろから抱き寄せられ僕は突然のことに頭が混乱した。

「もう1人になりたくないんです…」

寂しそうな顔で訴えるシルさんを見て、僕は動けなくなってしまうた。

「今日だけは一緒にいてくれませんか…？」

「…わかりました」

やっぱりずるいなあ…

明日、神様に謝ろう！そうしてシルさんと一緒にいることにした。

そのあと2人で他愛ない話をしたり、夕飯を一緒に作って食べたりとこの時間がすごく幸せに感じた。

ΔNo. 3

シルさんと他愛ないお話をして夕飯を食べたあと、

「今日は泊まっていつてくださるんですよね？」

「えっ」

あれ、一応今日中には帰るつもりだったんだけど…

やめてください、そんな上目遣いで見ないでください…

「えーと… 泊まっていきます」

「やったっ」

まあシルさんが笑ってくれるならそれでいいか。

「じゃあベルさんは先にお風呂入ってきてもらっていいですか？」

「いいんですか…？」

なんか夕飯食べさせてもらったり、お風呂に入らせてもらったり至れり尽くせりで本当に申し訳ない気持ちになった。

「いいんです、うふふ」

ん？なんかいまシルさんがいつもと違ったような…

まあいいか、

「それじゃあ先にお風呂に入らせてもらいますね」

「はい、どうぞ」

(… ベルさんはお風呂に入ってくれたようですね)

正直ここまで好きになっちゃうとは思いませんでした。

わざわざ家呼んだのですからちゃんとおもてなししないですよね。

ちゃんと私は覚悟しています、初めてだけでも上手くできるかな、

人の家のお風呂ってあんまり落ち着かないのかなって思っていたけれど、そんなことはなかった

湯船に浸かると1日の疲れが一気に取れるような気がした。

「でもシルさんいつたいたいどうしたんだろ…？」

まだ出会って2日しかたっていないのにあ、

なんて考えながらお風呂に入った。

お風呂から上がりあとは寝るだけとなった。

「シルさん、僕はどこで寝ればいいですか？」

ソファアとかシルさんだから床って言うことはないと思うけど…

なんて不安は一瞬で払拭された、

「何言ってるんですか？ベットで一緒に寝るに決まってるじゃないですか？」

笑いながら僕に言ってきた。

さすがにいろいろやばいと思うんですが…

「ソファーとかじゃだめですかね？」

「却下ですっ」

「やっぱりか…」

予想してなかったわけではないが、そうなたら困るなあと考えていたところだった。

「ここに寝てくださいいっ」

「はい…」

やっぱり女の人と一緒に寝るのは緊張する…

なるべくシルさんの方を見ないように後ろを向いて寝ようとすると、

「えいっ」

あれ？本当にどうやったのかと思うくらいにシルさんの方を向かされてしまった。

「ベルさん、私…」

「な、なんでしよう…」

「ベルさんのこと、好きになっちゃいました」

「……」
「そうだったのか……」

なんて答えればいいのか困っていると……

「急いで答えを出す必要はありませんよ？、ゆっくり考えていいんです」

「はい……」

「ただ私も勇気を出したので、ご褒美を貰います」

どっちかっていうとあげてるのでは？

とか考えていたら

「目をつぶって頂けますか？」

「……？わかりました」

言われた通りに目をつぶると

次の瞬間、僕の唇に柔らかいものが押し当てられた。

それがシルさんの唇ということに気づいてさらに頭の中が混乱した。

「私のファーストキスあげちゃいました」

僕は呆然として何も反応することが出来なかった。

「あれ？ベルさんも男の人なんですわね」

すこし照れながら話しかけてきた。

「っーすみません…」

でもしようがないことだと思う、シルさんはパジャマのまま僕に抱きついてキスしたら色んなところが触れて大変なことになっていたんだし…。

「私で良ければお手伝いしますよ?」

本当はお願ひしたいけど、いいのだろうか…

「遠慮しないでくださいね」

「じゃあお願ひしていいですか…?」

僕は顔を赤く染めながらそう答えた。

「それじゃあ脱がしますね?」

シルさんも顔を赤くしながら、懸命に平然を装っている。

「うわあ」

下着を脱がされてまじまじと見られるとやっぱりすごく恥ずかしい。

「私も脱がしてもらってもいいですか?」

頬を染めながら僕にお願ひしてきた。

ゆつくりとパジャマを脱がす、それだけでお互いがすごく興奮した。

「すごい綺麗です」

「ずるいです、そこで言うのは」

「シルさん：：期待してたんですか？」

僕は下着が濡れてるのを見て意地悪をしたくなった、

「もう意地悪しないでください：：私だって恥ずかしいんですから：：」

そんなシルさんの反応を楽しみながら下着を脱がしていく。

ゆつくり太ももをさすりながら脱がしていくと

「ひゃっ」

シルさんが色っぽい声をあげた。

「どうしました？」

「いえ、なんでもありません：：」

シルさんの秘部をみると触ってもないのですごく濡れていた。

「：：」

僕は無言でシルさんの秘部に触れた。

「んっ：：」

すこし指先を動かしてみる、

「あっ、あっ：：ベルさんもう我慢出来ません：：」

ゆつくりしていこうかなって思っていたんだけど：：

シルさんの懇願を聞いて僕も我慢できなくなってしまうた。

「それじゃあ挿れますね」

「はい……」

僕も初めてだから上手くできるか心配だなあ……

「あつ、いつ……」

「大丈夫ですか……？」

「すみません、ベルさん少しこのまままでお願いします……」

やっぱり痛かったのだろう、結合部からは血が流れている。

「……もう大丈夫なので動いても大丈夫ですよ？」

僕はそう聞いてゆっくり動くことにした。

慣れてきてだんだんと早く動かしていくと、

「ベルさんっ、ベルさんっ、もっとしてください……！」

僕もそろそろ限界が近くなってきた、

「シルさん、僕もそろそろやばいです……！」

「なかにっ、中に出してください！」

そう言われて、僕はシルさんにキスをしながら中に白濁液を思い切り出した。

「シルさん出します……！」

「出してください……！あつ、あつ、んうーっ！」

「ベルさん……大好きです」

そのまま疲れてたいこともあり、すぐに寝てしまった。

翌朝、

「昨日は楽しかったですっ」

「僕もすごい楽しかったです」

「また……お願いしてもいいですか？」

「シルさんが良ければ……」

顔を染めながら2人して笑った。

そのあとは ホームに帰ったあと神様にもものすごく怒られたのは言うまでもなかった。

No. 4

ホームに帰った僕は案の定、神様に怒られた。

心配させてしまったのはほんとに申し訳ないと思う。

「神様ほんとにごめんなさい！」

「まあベル君のことだから何か事情があつたんだろうし、こうして帰ってきてくれたからボクは許すよ。」

ありがとうございます、神様。

でもすごい心が痛いけど、きつと気のせいだろう。

サポーター。ダンジョンの探索時における非戦闘員。

冒険者はサポーターを顧みない。

彼等はどこまでも残酷だ、

ほんとうに、

裏切るのに困らないな、冒険者は。

そんなようなことを考えながら、歩いていく。

今日もダンジョンに向かって歩いてみると、突然呼び止められた。

「初めましてお兄さん。突然ですがサポーターなんか探していたりしませんか？」

「え、… え？」

「どうしたんですか？冒険者のおこぼれを預かりたいサポーターが自分を売り込みに来てるんです」

ちようどよかった、サポーターがいてくれたらなつて思っていたところだった。

… じゃなくて！

さすがにまだ一人の方がいいだろう。まだ他人を守るほど強くないのだから。

「いや、でも…」

「お願いです！連れて行ってくださいませんか？」

こちらを上目遣いで見つめて頼み込んだ。

その表情が一瞬悲しく見えたのは気のせいだろうか。

「分かった、じゃあお願いしていい？」

自然と僕の口からその言葉が漏れていた。

「あつ、自己紹介もせずすみません、リルルカ・アードです。よろしくお願いします！」

「じゃあ、君は無所属のサポーターじゃなくて…」

「そうですよ、リリはちゃんと『ファミリア』に入っています」

大通りからすこし路地に入ったところにある食堂で小さな少女と話をしていた。

「ファミリア」の名前は？」

「ソーマ・ファミリア」ですよ、割と有名な派閥です。」

僕はよく知らないけど…

「でもリリはこんなに小さいですし、何も出来ないのに『ファミリア』でも邪魔者扱いされてるんです。」

話を聞くうちに彼女があまりファミリアでよく思われていないことが分かってきた。

「そういうえば、ずっとフードを被ってるけど…」

「あ…これですか…？」

そういうとそつとフードを外した。

「これでいいですか…？」

「あれ…？」

頭の上にあったのは可愛らしくピコピコ動く獣の耳だった。

「リリは犬人なんです。」

僕は無意識のうちにその耳を触っていた。

「あう…」

本物だ、ふにふにしてる

って…

「ご、ごめん！」

なんだか悪いことしたような気分になった…

事情を聞いたところで僕達はダンジョンに潜ることにした。

「そういえば契約金とかはいるんですか？」

「いえ、今日はお試しなので探索での収入を分ける形でいいですよ？」

「それだけでいいんですか？」

「はいっ」

「ふっ！」

『ギシャアア!?!』

胸元にナイフを突き刺しキラアアントが断末魔をあげて、灰に変わった。

6階層、今の僕がソロで潜った最高到達階層だ。

最近はかなり対応が早くなってきているなあと自分でも実感する。

「ベル様ってお強いんですね！」

「いやあ、そんなことないよ？」

リリに褒められてすこし照れてしまった。

でも今日はかなり良かったかな。

「リリ、そろそろ戻ろうか、」

「分かりました！」

「じゃあベル様、リリに着いてきてくれますか？」

「？分かった。」

その帰り道、僕はほとんどモンスターに出会わずダンジョンを抜けることが出来た。

「リリはなんでモンスターのいない所が分かるの？」

「何回も通つて見つけたんです。ベル様も疲れてるでしょうし、あまり戦闘で無理させたくないですし、リリにはこれくらいしか出来ないのです…。」

話し終わるとちようど換金が終わったので、今日の収入の半分をリリに渡す。

「え、こんなに!? 申し訳ないですよ、ベル様！」

「いいんだって、今日はすごい稼げたし、リリのおかげですごく楽だったしそのお礼だよ。」

「ベル様…。」

すみません、ベル様…。

そう心の中で言つてダンジョンに潜つているときに盗ったナイフを触る。

「じゃあ今日はこれで！明日もよろしくねリリ！」

「はい！また明日です！」

僕はリリと別れてから今日予定されているギルドの担当のエイナさんとの勉強に向けてギルドの中へ歩いていった。

勉強会も終わりに差し掛かり、今日も疲れたななんて思っていると、

「あれ、ベル君？」

「なんですか？」

「ナイフはどうしたの？」

ん、ナイフ……？

腰に手を当てる。

あれ？

目で確かめてみる、

《神様のナイフ》、ある。

ただし鞘だけ……。

「お、落としたー！ー！」

ギルド全体に響くような大声で僕は絶叫した。

路地裏を歩いてゆつくり考える。

ナイフだけじゃなくて鞘も盗るべきだった。

あの後ナイフを鑑定士の所へ持っていったらなんと50ヴァリスで買い取ると言わ

れてしまった。

数千万ヴァリスはくだらないと思つていたのに。

やはり鞆もないと認められないらしい、

あれだけ硬いキラアアントがばさばさ切れる業物がそんなに安い訳ないのだから。

そんなことを考えて歩いていると、

「すみません、シル。荷物持ちなんてさせてしまつて、」

「全然平気だよ？でもリユーはいつもこんな道通つてるの？」

前から人が来た。エルフとヒューマン。

視線を切りナイフを袖に隠す。

そして、彼女達の横を通り過ぎる。

「待ちなさい、そのパルウム」

冷たい声が路地裏に響く。

No. 5

「待ちなさい、そここのパルウム」

冷たい声が路地裏に響く。

私はこの時ものすごいプレッシャーに襲われた。

なんだ、これは…

そう思った時にはもう私は動けなくなっていた。

「その袖に隠したナイフを見せて貰えますか？」

「はい…」

言われるがままナイフを差し出した。

エルフはそのナイフを手にとって見てから

「私はこのナイフを持っていてる人物を一人しか知りません。」

「そうですか、でもそれは私が買ったんです。」

と言って、その場から去ろうと歩きだそうとした。

「ぬかせ。」

その一言で体の芯から凍りついた。

「……っ！」

【神聖文字】が刻まれた武器の持ち主など、私は1人しか知らない」

見ずともヒューマンの少女がぎよつとしたのが分かった。それほどまでの威圧だ。

「動かないでください」

足音がすぐそこに迫ってくる。

もう逃げるしかない。

別れ道めがけて地を蹴った。

「警告はしました」

曲がり角を曲がろうとした瞬間、途轍もない衝撃が手を襲う。

「ぎゃっ!」

何かが飛んできた。

赤く爆発し潰れている。

林檎だ。

「腹に力を入れた方がいい」

足が振り抜かれ、予告通りに脇腹を撃ち抜いた。

「ふぎやあつ!?!」

やばい……！どうしよう！

ナイフが見当たらず、ベルはダンジョンに向かって必死に大通りを走り抜けていた。そのうちに大通りを走っていたはずが路地裏の道にいつの間にか入ってしまった。

「あれ？道を間違えたかな……」

来た道を引き返そうと回れ右した所で小さな犬人が目に入った。

「リ、リリ！」

「ふあ……？」

「どうしたの!? なにかあったの!?」

「その声は……ベル様っ?」

リリは大きなダメージを負っているようだった。

「だ、大丈夫なの!?」

そつと彼女を抱き上げ、路地裏から少しずれる。

ポーシオンあつたつけ? と、レッグホルスターに手を伸ばしかけたところで、

「まさか逃げられるとは……」

エルフのリユーが路地裏から姿を現した。

「今度はリユーさん!」

「ああ、ちょうどよかった実は貴方の…。」

言いかけたところでベルが抱き上げているリリを見て、

「クラネルさんどいてください」

「ひゃっ！」

リリのフードを強引に外した。

しばらくリリを見つめたあと、

「失礼しました」

といつて直ぐにフードを戻した。

「な、なにしちややってるんですか！リリ、大丈夫？」

「は、はいい…。」

「すみません、人違いでした。」

そしてもう一人路地裏から出てきた。

「もうリユー！食べ物投げちゃだめでしょ！」

「すみません、シル」

「いったいなんの事なんだろう…。」

「あのう、そろそろ説明してくれると助かるんですけど…。」

「あ、ベルさん」

律儀にこんにちは、と頭を下げるシルに「あ、どうも…。」と声をかける。

「ところでクラネルさん、貴方はいま黒いナイフを持っていますか？」

リユーが聞いてきた。

「あ、そうだった！2人とも上から下まで真っ黒なナイフ見かけませんでしたか!？」

そうだった！僕はこれを探しに来てたんだった！まあないだろうと思ひ、直ぐにまたダンジョンに探しに行こうとすると、

「これですか？」

「うわわわああ!!!」

狭い道にベルの音が響く。

「ほんつとうに！ありがとうございます!!」

「…クラネルさん困ります、このようなことは私ではなくシルに向けてもらわなくては…。」

「リユーは何言ってるの!？」

シルの悲鳴を聞きながら、ごしごしと顔を拭うベルは漆黒のナイフを受け取った。

「ああ良かった…。神様ごめんさい、もう二度と落としたりしませんっ…。」

ほつと安堵した所で疑問が出てきた。

「そう言えばこのナイフどこで見つけてくれたんですか？」

「いえ、見つけたと言うより一人のパルウムが所持していました。」

「パルウム？」

「もしかしてさっきのは…。」

「ええ、先程までそのパルウムを追い回していたのですが、逃げられてしまい…この場にいた彼女を疑ってしまったのです。」

「ああ、そういうことですか」

「すみません、とリユーがベルに謝っているのをみて、リリは終始居心地が悪そうにしていた。

「そんなリリの耳にシルがおもむろに唇を寄せた。

「あんまりおいたしちやダメよ？」

「!!」

ぞくつ、と小さな体が可哀想なくらい揺れた。

「シルは何事もなかったかのように立ち上がり、リユーと一緒に裏道へ入っていった。

「リリ、今シルさんになんて言われたの？」

「べ、別に…あの、ベル様？」

「なに？」

「あの人達は、何者なんですか？」

「酒場の店員さんなんだ。『豊饒の女主人』ってところの。結構有名みたいだけどリリは知ってる？」

「…ベル様」

「ん？」

「絶対にリリをそこへは連れていかないで下さいね？」

「えっ、あつ、うん」

泣き笑いを浮かべるリリにそう答えるしかなかった。

裏道を歩きながら、

「シル、本当にあれで良かったんですか？」

「なんのこと？」

「さっきのことです」

リユーはシルがこれ以上しなくていいよと止めてきたから追及するのをやめたのだ、

「ん、まあこれを機に変わってくればいいですけど」

と微笑を浮かべながらゆっくり歩く

「それにしてもシルがあそこまでクラネルさんに心を許しているなんて驚きました」

「へっ？」

突然、リユーからもたらされた言葉に、顔が一気に熱くなったのを感じた。

「この前、シルが一軒家からクラネルさんと仲良さそうに出てきてたのをみたんです」
あの時か！

いやまあ、そうなんだけど、多分リユーが思っている以上というか…

「えつと…」

いつもなら友人のからかいなんて、すぐに躲す言葉を思いつくのはなあ、ベルさんのことになるとどうも頭が働かなくなる…

「でも、シルが幸せならそれでいいんです」

言葉は真剣そうだが、目が完全に笑っていた。

「リユーー！」

そんな言い合いをしながら『豊饒の女主人』に向かって2人で歩いていった。

No. 6

リリというサポーターの存在は、劇的だった。

まず、彼女がバックパックを受け持ってくれたため、僕は戦利品をいちいち地上へ換金しに行く必要もなく、普段より長い時間ダンジョンに潜れるようになった。

これまで探索する階層が下部の層に向かう度、換金所からダンジョンへの往復距離が長くなったので、到達階層が増えたところでそこまで稼ぎが増えるということもなかったのである。いわば時間のロスだ。

それが今日、綺麗に解消された。

僕はリリのおかげで重荷となっていたバックパックを装備する必要もなくなり、身軽になつて7階層を暴れに暴れた。

その結果。

ギルドの換金所から受け取ったお金は…

「……………」

空いた口が塞がらなかった。

「2万6000ヴァリス……………」

顔を見合わせ、次の瞬間

「やったー!!」

僕達は歓喜して飛び上がった!

「これ夢じゃないよね!!現実だよね!!ありがとう!ほんとにリリのおかげだよ!!」

「馬鹿言っちゃいけないです!ベル様っ!Lv1の5人組のパーティーが1日かけて稼げるのが2万5000ヴァリスちようどくらいなんです!つまり、ベル様はお1人で彼らを優に凌ぐ働きをしたことになりましたっ!」

「いえーいと椅子の上に立ったリリとハイタッチを交わしながら、僕らの高揚感は留まるどころを知らなかった。」

「では、ベル様そろそろ分け前を頂けますか?」

「うん、はい!」

どぼつと換金された半分をリリに渡す。

「……え?」

「うん?」

「あの……多くないですか?」

「リリが居てくれたからこんなに稼げたんだし、これくらい当たり前だよ!」

「独り占めしようとか思わないんですか……?」

「えっどうして?」

心底不思議そうに僕は問い返した。

「… 変なの」

その小さな呟きを僕は見事に聞き逃した。

リリと別れて、今日くらいご飯でも食べて帰ろうと思い『豊饒の女主人』によると、

「ベルさん!」

ドンツと後ろから抱きつかれた。

「シ、シルさん!」

何してるんですか! って叫びそうになったが何とかこらえた、

「どうしたんですか?」

平然を装って聞いてみる

「寂しかったんです…」

「えっ…」

「最近なかなかベルさんとお話しできなかつたから…」

そう言えば全然この酒場にも来れていなかったなあ

「すみません…」

「いいんです、また会えたので」

「そうですか」

「仕事に戻りますね？」

「はい」

注文を済ませ、しばらく待つていると今度はリユーさんが料理を持ってやって来た。

「お久しぶりです、クラネルさん」

「リユーさんもお久しぶりです」

リユーさんは料理をテーブルの上に置いてから、僕の耳に唇を近づけた。

「最近、クラネルさんがいなくていつもシルがそわそわしていたんです。」

「そうなんですか？」

「ええ、いつもなにかダンジョンであったんじゃないかと心配していたので、なるべく会いに来て下さると助かります」

恋煩いで仕事で失敗されても困るので、と冗談半分に付け足された。

料理を食べ終わってそろそろ帰ろうかななんて思っていたら、ふと本棚に立てかけてある1冊の本に目が止まった。

「あんな本、前からありましたっけ？」

「いえ、誰かの忘れ物のようです」

んー、少し気になるなあ

「興味がありますか？」

「えっと、まあ…」

「分かりました、ミア母さんに貸し出しの許可を貰ってきます」

「えっ」

そんなにでもないから大丈夫です、と言おうとした時にはもうリユーさんはそこになかった。

「持つて行って言いそうなので、どうぞ」

「あ、ありがとうございます。」

「では、またお待ちしますね」

「はい、近いうちにまた伺います」

そうして『豊饒の女主人』を後にした。

ふー、今日も疲れたなあ

ホームに戻りソファでくつろいでいると本を借りていたのを思い出した、
「そう言えば…」

借りてきた本を取り出し、早速読んでみることにした。

『ゴブリンにも分かる現代魔法』

タイトルはまあ、あれだ

というかゴブリンが分かっちゃダメだろうと心の中でツツコミを入れた。
ページを進めていくと、

『欲するなら問え、欲するなら砕け。欲するなら刮目せよ。虚偽を許さない醜悪な鏡はここに用意した』

違う。

【僕の顔】だ。額から上が存在しない僕の顔面体。

違う。

【仮面】だ。僕のもう1つの顔。僕の知らない、もう1人の本心。

ページをめくる。

『じゃあ、始めよう』

瞼が開いた。僕の声が聞こえた。

『僕にとって魔法ってなに？』

分からない。

けど、絶対的な力があるもの

全てを覆せる、圧倒的な力

『僕にとって魔法はどんなもの？』

もの？

想像するとすれば、それは炎だ

魔法と聞けば真っ先に思い浮かぶのは炎。

強くて、猛々しく、熱い。

『魔法に何を求めるの?』

より強く、あの人のもとへ。

より速く、あの人のもとへ。

『それだけ?』

それ以上願うことがあるとするならば、それは…

「英雄になりたい」

全てを救う英雄に、

『子供だなあ』

…ごめん。

『でもそれが僕だ』

そして最後に本の中の僕は微笑んだ。

「……くん!……ル君!」

あれ……? 神様?

「ベル君!」

次の瞬間、僕は目を覚ました。

「あっ！神様！」

「ああ、そうだよ？どうしたんだい、寝るなら机じゃなくてもつとマシンなところで寝ればいいのに」

「そうします…」

「そうだ、ベル君。寝る前に『ステイタス』を更新しちやおう」

「シャワーを浴びてから、ベッドに向かう」

「以前と比べると更新頻度は高くなっている。」

「どうですか？神様？」

「んん、んん？…むう！」

「『耐久』とかを除くとどの基本アビリティはSに近くなってきたよ」

「そうなんですか？」

「相変わらず凄い成長速度だね、ベル君はほんとにすご…い…」

と言いかけて、神様の言葉が止まった。

「…魔法」

「えっ？」

「魔法が、発現した」

ん？

「ええええええ!!!」